

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 24 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520315

研究課題名（和文） スラヴ語スラヴ文学比較対照研究の課題と方法

研究課題名（英文） Comparative and Contrastive Studies in Slavic Linguistics and Literatures

研究代表者

中島 由美（NAKAJIMA YUMI）

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：20155732

研究成果の概要（和文）：

スラヴ言語文化研究について優れた実績を重ねてきたメンバーによる研究グループが、旧ユーゴスラヴィア連邦崩壊後の混乱やEU拡大に伴うヨーロッパ再編などの社会情勢が一段落した今日のスラヴ圏について、研究動向を把握し新たな研究の方向性を確立する活動を行った。当該地域や海外研究者との研究交流を活発化して研究成果発信ネットワークの一層の充実を図るとともに、研究成果を生かし一般向け図書の充実にも貢献した。

研究成果の概要（英文）：

Our research group, which brings together a host of excellent scholars working in the field of Slavic Studies, appraised current academic trends and set new research directions and objectives, to be pursued at a time following the turmoil caused by the collapse of former Yugoslavia and the structural changes that the European Union has recently gone through. We intensified the exchange between researchers in and outside Slavic countries and improved the existing network for sharing academic achievements, while contributing the results of our own research to publications aimed at the general reader.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度	0	0	0
年度	0	0	0
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：スラヴ言語学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：スラヴ諸語研究、スラヴ文学研究、南スラヴ圏言語文化、スラヴ間比較

1. 研究開始当初の背景

(1)社会的背景：1991年の旧ユーゴスラヴィア連邦崩壊とそれに続く内戦、各民族の新たな独立など、20世紀末はヨーロッパ東南部に位置するスラヴ世界にとって変動・再編の時

期であった。紛争が一段落し、新たに独立した諸国は自らの言語の独自性を標榜し今日に至っているが、EU拡大という状況が加わり、各国はさまざまな対応を新たに迫られている。変化の最も激しかった南スラヴ圏からはスロヴェニア、ブルガリアの2国がEUに

加盟し、このほか加盟準備段階に入っている国もあるが、いずれも自民族語の充実とグローバル化に応じた外国語教育との兼ね合いなど、言語政策上重要な問題を抱えている。

このように、大きな社会変化の中でも言語が民族文化の基盤をなす存在であることに変わりはなく、むしろその役割はますます大きなものとなっていると言える。従って、歴史研究や国際政治学、経済学などあらゆる人文科学にとって、当該地域の言語研究の充実が一層重要な緊急課題であることが再認識され、新たな社会状況への対応が望まれた。

(2) 専門研究上の背景：スラヴ研究の中でも、わが国では南スラヴ圏の専門研究が、もともと人材も少なかった上に、上述のような社会変動期に渡航制限や研究ネットワーク維持が困難になるなどの影響を被り、進展が阻まれた。新たな民族主義の台頭が客観的研究の維持を難しくするという問題もあり、当該地域の研究を志す次世代の人材育成に支障が生じ始めていた。そこで、専門研究の継承を図るためにも、社会的状況が一段落したいま新しい研究動向を把握し研究の方向性を探るとともに、若手研究者を支援しスラヴ圏言語文化研究のレベル向上と、研究成果の海外への発信を促進することが緊急の課題であると認識された。

2. 研究の目的

以上のような背景に鑑み、本研究グループの専門分野を生かすため、研究目的を以下のように設定した。

(1) 新しい状況における研究動向の正確な把握を行い、それに対してわが国スラヴ研究がどう対応していくべきかという方向性を確立する。とくにわが国で比較的人材の少ない南スラヴ圏の調査を重点的に進め、あわせて他の地域との比較を行う。

(2) 現地での研究の促進、研究交流活性化のために、海外の研究者・研究機関との連携を緊密にし、研究成果発信ネットワークを整備・強化する。あわせて我々の研究蓄積を次世代に継承するため、若手研究者に対する支援を行う。

(3) 我が国スラヴ研究成果の総括として日本におけるスラヴ研究文献目録データベースの運営を続け、データを更新するとともに、独自の検索プログラムの整備を行う。

3. 研究の方法

本研究グループは、スラヴ研究において日本を代表する専門研究者によって構成されている。各メンバーはスラヴ言語文化研究に共通の素養を備えながら、かつ各人が専門とする地域・言語をカバーする能力を有し、現地研究機関においても評価を得ている。研究

代表者、研究分担者は連携研究者と協力し、各自が関係する地域について、新しい社会状況を見極めつつ、研究動向の情報収集・分析に当たる。その上で、海外研究機関・研究者との一層の関係強化を図る。そのための具体的方法は以下の通りとした。

(1) 本研究グループを専門及び地域に応じて二つのメイン・グループに分ける。言語を専門とする研究代表者中島と、佐藤、三谷2名の研究分担者、及び連携研究者野町は言語記述グループの中心をなし、南スラヴ圏の研究動向の把握、及び他のスラヴ域との比較を行う。三谷、野町は南スラヴ圏の現代語研究を、佐藤は古典文献言語の研究動向を調査し、中島が全体を総括する。

文学、民族学を専門とする研究分担者坂内は、連携研究者伊東、沼野、村田とともに民族化・文学グループを形成し、社会変化後の研究動向調査と今後の研究方向の確立を視野に入れた活動を行う。

これらふたつのグループの側面にコーパス構築・データ運用技術協力グループを置き、研究協力者マルチェフ、山崎らを活用する。また、海外ではリュブリャナ大学のアンドレイ・ベケシュや、新体制後最も信頼できる言語研究者として国際スラヴスト会議文法部会運営に携わるベオグラード大学のブレドラグ・ピペルの協力を仰ぐ。

(2) 上記の調査活動と並行して、わが国スラヴ研究成果の海外への発信を促進する活動を行うが、その際には日本スラヴィスト協会のネットワークを最大限に活用する。日本スラヴィスト協会は学会としての実態を持つものではなく、5年に一度開催されるスラヴ界で最も権威ある学会である国際スラヴィスト会議への正式参加を維持するために必要な組織で、本研究グループ・メンバーが中心となって運営してきた。海外ネットワークの再構築に際して、この組織を窓口とするのが最も効果的である。

そのためにもまず、本研究の前提となった平成19年―平成21年の科学研究費補助金の支援によって達成した、第14回国際スラヴィスト大会（於マケドニア）参加のまとめを行い公表する。次に、海外研究者との研究交流を促進するため、スラヴ圏もしくは日本において国際シンポジウムを開催する。また、本研究グループが海外の研究機関で積極的に成果発信に関わる。

これと並行して、研究の蓄積を次世代に継承するため、若手研究者への支援策を実行する。具体的には、国際スラヴィスト会議本会議や諸シンポジウムへの参加（オブザーバ参加を含む）、若手を中心とした研究発表会の開催、発表予稿集や定期刊行物への投稿等、

若手に成果発信の場を提供する、などである。

(3)これまで研究代表者らは、スラヴ研究データベースを作成し、独自の検索システムを開発して Web 上で公開しているが、海外からのアクセスも常時あり、わが国では他に類例のない検索資料として機能している。しかしまだまだ改善の余地があるため、コンテンツの更新も併せて行い、事業を将来にわたって継続的に維持できるよう準備する必要がある。これにはコーパス構築・データ運用技術協力グループが当たり、中島が総括を行う。

4. 研究成果

(1)多民族国家旧ユーゴスラヴィア連邦においては共通の公用語「セルビア・クロアチア語」が国家統合のシンボルであったことからわかるように、この地域において言語は特別の意味を担ってきた。連邦崩壊後、国家独立に伴ってクロアチア語が正式に分離し、続いてボスニア語、遂にはモンテネグロ語と、民族国家成立に伴い新たな言語が続々誕生した。

調査については、中島が最も密接に関係しているマケドニアとセルビアを、三谷はクロアチア、スロヴェニア及びそれらと西スラヴ圏との比較を、その他の地域と他のスラヴ圏との比較については野町が担当し、現地調査も行った。中島は全体総括の立場から、2010年10月にマケドニア、スロヴェニア二か国を訪問し、マケドニアでは科学芸術アカデミーとの交流による現地調査計画を確認し、またスロヴェニアではリュブリャナ大学に於いて海外協力者のベケシュが開催した交流シンポジウムに参加、新体制における言語政策、とくに英語・独仏語等EU有力言語以外の言語教育が抱える問題点について討論を行った。中島は日本とスラヴ圏における方言研究の違いと言語政策との関係について講演した。リュブリャナ大学との研究交流はその後も継続し、2012年2月には筑波大学で行われた言語政策問題のシンポジウムで、中島が報告を行った。

スロヴェニアは旧ユーゴスラヴィア圏では最も経済が安定し教育水準も高いが、EU水準を満たすことは容易ではない。こうした経済面での厳しさが言語政策にも反映し、ボローニャ協定参加後は高等教育機関における言語教育に影を落としている。他の旧連邦諸国はいずれもスロヴェニアよりはるかに低い経済水準にあって、独自の言語文化の華々しい標榜、クロアチアで顕著な外来語の自国語言い換え政策の推進などとは裏腹に、若い世代の関心はEU有力言語や英語力の増強に専ら注がれていると言っても過言ではない。そのためスラヴ研究を支えてきた厳しい基礎訓練が維持できなくなるなどの問

題が懸念されている。

しかしその一方で、有力外国語の教育整備のために、自国語との間の辞書等レファレンス類が一挙に充実し、日本において一般向けの教材や専門的な辞書の編纂に関わる我々を勇気づける側面もあった。国情の一応の安定とともにこれら新たな資料の登場で、社会変化に対応した語学教材や概説的書籍の執筆、比較的規模の大きな研究事典類での概説記事など、獲得した新しい知見を社会に還元する機会が増え、本研究グループの研究成果の一翼を担う結果となった。

その他の重要な研究交流活動としては、2009年、2010年と続いて連携研究者野町の招きにより来日した合衆国のスラヴ研究者との研究会を、本研究グループ共催によって開催できたことも大きい。来日したエール大学の R.グリーンバーグ、シカゴ大学の V.フリードマンとともに、とくに南スラヴ、バルカン諸語の専門家で、現地とも常に密接に関わり、紛争時にはバルカン諸国を文化面で積極的に支援するなど、大きな影響を与えてきた存在である。非スラヴ圏における研究の可能性について彼らの見解を直接交換し、討論できたことは有意義であった。両氏の講演内容については *Comparative and Contrastive Studies in Slavic Languages and Literatures vol.2010* として 2012 年前半に公表する。

(2)わが国スラヴ研究成果の海外発信促進のための活動として、まず、本研究の前提となった平成19年－平成21年の科学研究費補助金の支援による第14回国際スラヴィスト大会（於マケドニア）参加の総括を行い、発表予稿集を改訂して欧文雑誌 *Comparative and Contrastive Studies in Slavic Languages and Literatures vol.2008 (revised edition)* として発行し、成果を内外に公表した。大会での日本代表5名の研究論文と、若手研究者による投稿論文が含まれている。なお、国際スラヴィスト会議への参加は、上述のように本研究グループのメンバーが運営する日本スラヴィスト協会の重要な活動であり、これまでの実績を今後も次世代に継承したい。そこで、2013年の次回大会（於ベラルーシ）参加準備を2011年度より開始した。わが国が獲得した5名の発表枠を有効活用するため、特に次世代となる若手による研究成果の調査を重点的に行った。

若手研究者への継承という意味では、連携研究者の野町は、若手の中でも海外での活躍が最も目覚ましく、いずれの学会においても高く評価されている。2011年11月には国際スラヴィスト会議文法部会定例会議を招致、日本スラヴィスト協会との共催によって大規模な国際シンポジウムを企画し、事務局を

務めた。スラヴィスト会議に加盟する各国を代表する主な部会メンバーが揃い、充実した学術会議となった。統一テーマは「スラヴ諸語における文法化」とされ、我々も取り組むスラヴ世界の新しい言語変化の分析につながるものである。本研究グループからは三谷が代表して基調報告（招待講演）を行い、わが国スラヴ研究のレベルの高さを示した。

本研究グループはまた、若手研究者支援活動の一環として研究集会を2012年2月に開催した。研究発表の場としては日本ロシア文学会や西スラヴ学研究会などがあるが、今回は発表の機会の少ない語学研究に携わる若手を対象とした。古文獻研究から言語接触を視野にいたした研究など、多様な取り組みの報告があった。本研究グループからは、中島と伊東が司会を担当するとともに、それぞれが関係する分野の研究動向について報告した。若手からわれわれに対しては、わが国研究者が現地で調査研究に取り組むための助言が求められた。

(3)わが国スラヴ研究の総括に関する成果発表として、本研究グループは日本におけるスラヴ研究文献目録データベースを構築し、Web上で公開している。連携・研究協力者・研究補助者等多数の者の協力により、データベースの更新を進めた。また、公開開始時には独自の検索プログラムを設計し運用しているが、引き続きプログラムの検証を徹底的に行い、ほぼ改善を終えることができた。また、情報収集をWeb上で行う方式に改め、運用を始めた。2012年には多言語に対応したWebページの改訂と、本研究終了後も引き続きデータベースの更新を行うための準備は、最終年度に行った。

なお、Web上での公開を優先したため、印刷版の文献目録は年度内に終わらなかったが、要望が強く寄せられているので、準備中である。

本研究グループは科学研究費の支援により、研究交流や現地調査のための海外渡航と国内での研究打合せに対する旅費の支給、大規模な作業を行うための研究補助者への謝金、作業を円滑に行うための電子機器の充足やソフト類、周辺機器の補充更新などを必要に応じて行うことができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計15件)

①中島由美、The Current State of Slavic Studies in Non-Slavic Countries、Comparative and Contrastive Studies in Slavic Linguistics and Literatures、vol.

2012、査読無、2012 (印刷中)

②伊東一郎、«Сатор»-формула как заговор в балто-славянской фольклорной и письменной традиции、早稲田大学大学院文学研究科紀要、57、査読無、2012、163-184

③坂内徳明、リトアニア人考古神話学者マリヤ・ギンブタスの仕事—生命の木と蛇に憑かれて—、言語文化、48、査読無、2011、69-91

④三谷恵子、南モラヴィアのクロアチア語、スラヴ研究、58、査読有、2011、63-90

⑤野町素己、スロヴェニア語の構文「dobiti + 受動過去分詞」について—文法化の観点からの分析と試論—、西スラヴ学論集、14、査読有、2011、26-47

⑥野町素己 The Recipient-Passive Construction and Its Grammaticalization in Kashubian、Gedenkschrift für George Y. Shevelov zum 100. Geburtstag、査読無、2011、109-135

⑦村田真一、メタфора русской и японской поэзии в эпоху модернизма—Марина Цветаева и Ёсано Акико、SLAVIA、80、査読有、2011、50-59

⑧村田真一、К критериям отбора фразеологизмов в драматургии(на примере пьес А.Сухово-Кобылина、Дискурсивные и дидактические проблемы фразеологии、査読無、2011、244-249

⑨野町素己、カシュブ語の受容者受動構文とその文法化をめぐって、スラヴ研究、57、査読有、2010、27-57

⑩中島由美、小関武史、教材作成プロジェクト報告、言語文化、46、査読無、2010、112-115

⑪佐藤昭裕、古ロシア語と古教会スラヴ語における指示代名詞 *сь, онь, ть* について、京都大学文学部紀要、50、2010、査読無、81-131

⑫中島由美、Tipovi zamenska upotreba vo jugoistochnot del na juzhnoslovenskata jazichna teritorija (revised edition)、Comparative and Contrastive Studies in Slavic Languages and Literatures、vol.2008(revised edition)、Japanese Association of Slavists、2009、査読無、42-58

⑬野町素己、ライコ・ナフティガルについて、プリモシュ・トゥルバル生誕 500 周年およびスロヴェニアの EU 議長国記念スロヴェニア 言語・文化シンポジウム発表論文集、査読無、2009、58-71

⑭村田真一、Философия театра и эпоха авангарда : к вопросу театротерапии、Авангард и идеология : русские примеры、査読無、2009、565-574

⑮伊東一郎、プーシキン『西スラヴ人の歌』におけるセルビア民謡の翻訳 2 篇について (1)、早稲田大学大学院文学研究科紀要、54、査読無、2009、159-174

上記論文は一橋大学機関リポジトリで公開しています。

<http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/ir/index.html>

[学会発表] (計 8 件)

①中島由美、筑波大学大学院・国際交渉力強化プログラムシンポジウム、About dialects: Macedonia and Okinawa、2012年2月7日、筑波大学

②三谷恵子、国際スラヴィスト会議文法構造研究部会国際シンポジウム、On mimo: a Consideration on Lexicalization in Slavic、2011年11月12日、北海道大学スラブ研究センター

③野町素己、Shared Grammaticalization in the Transeurasian Languages、On Contact Induced Grammaticalization: Internally or Externally Induced?、2011年9月22日、ルーヴェン大学 (ベルギー)

④村田真一、講演会「日本のスラヴ文学研究の歴史と展望」、История и перспективы литературоведения в японской славистике (招待講演)、2011年2月21日、チェコ科学アカデミースラヴ研究所 (チェコ)

⑤佐藤昭裕、日本ロシア文学会関西支部秋季研究発表会、古ロシア語と古教会スラブ語の指示代名詞 *сь, онъ, ты* の使用について、2010年12月4日、京都産業大学

⑥中島由美、リュブリャナ大学言語研究会、Jazichna procesija u pesmama iz japanskih i slovenskih primera (招待講演)、2010年10月11日、リュブリャナ大学 (スロベニア)

⑦村田真一、国際学会「芸術テキストにお

ける含意と明示」、Авторская метафора и “текст над текстом” в драме: на примере стихотворных пьес И.Анненского и М.Цветаевой、2010年5月21日、科学アカデミーロシア語研究所 (ロシア)

⑧野町素己、17th Balkan and South Slavic Conference、Does Slovenian have 3 passive constructions? On the so-called recipient passive and its grammaticalization in Slovenian、2010年4月15日、オハイオ州立大学 (米国)

[図書] (計 15 件)

①中島由美、Japanese Association of Slavists, Comparative and Contrastive Studies in Slavic Languages and Literatures vol.2011 (編著)、2012、印刷中

②中島由美、朝倉書店、日本語学大事典 (佐藤武義ほか監修、分担執筆「ロシア・東欧の方言学」ほか)、2012、印刷中

③中島由美、大修館書店、文字を楽しむ小事典 (町田和彦編、分担執筆「スラヴ世界のふたつの文字」ほか)、2011、276 (20-25)

④三谷恵子、三省堂、スラヴ語入門、2011、200

⑤野町素己、北海道大学スラブ研究センター、The Grammar of Possessivity in South Slavic Languages: Synchronic and Diachronic Perspectives (編著)、2011、138

⑥伊東一郎、生活ジャーナル、ロシアの文化・芸術 (長塚英雄編、分担執筆「ロシア民謡一暦上儀礼歌、家庭儀礼歌、叙情歌」)、2011、453 (42-62)

⑦山崎信一、Institute of International Politics and Economics (Belgrade)、 “National Territory in History Textbooks of the Yugoslav Successor States,” in: Duško Dimitrijević and Ivona Ladevac (eds.), *Japan and Serbia. Regional Cooperation and Border Issues: A Comparative Analysis*, 2011, 190 (40-45)

⑧中島由美、野町素己、白水社、ニューエクスプレス セルビア語・クロアチア語、2010、149

⑨中島由美、明治書院、日本語研究の 12 章 (上野善道監修、分担執筆「言語地理学と方言生活の現場」)、2010、528 (54-68)

⑩三谷恵子、白水社、クロアチア語のしくみ、

2010、144

⑪野町素己、成文堂、ロシア・中欧・バルカンの言語と文化（長與進・桑野隆編、分担執筆「バルカン半島の諸言語とバルカン言語学」）、2010、338（97-114）

⑫野町素己、北海道大学スラブ研究センター、Россия и русские глазами инославянских народов: язык, литература, культура 1(編)、2010、183

⑬伊東一郎、成文堂、ロシア・中欧・バルカンの言語と文化（長與進・桑野隆編、分担執筆「ロシア・中欧・バルカン世界のことばと文化」）、2010、338（1-18）

⑭中島由美、大修館書店、林徹、梶茂樹（共編、分担執筆）、事典世界のことば 141、2009、584（298-301、326-329、362-365）

⑮三谷恵子、松籟社、帝都最後の恋（ミロラド・バヴィッチ、翻訳）、2009、200

〔その他〕

ホームページ等

http://www.soc.hit-u.ac.jp/~ynakajima/jsa/studijsa_frame.html

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中島 由美 (NAKAJIMA YUMI)
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号：20155732

(2) 研究分担者

坂内 徳明 (BANNAI TOKUAKI)
一橋大学・大学院言語社会研究科・教授
研究者番号：00126369

佐藤 昭裕 (SATO AKIHIRO)
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：50135498

三谷 恵子 (MITANI KEIKO)
京都大学・大学院人間・環境学研究科
・教授
研究者番号：10229726

(3) 連携研究者

伊東 一郎 (ITO ICHIRO)
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：60151495

野町 素己 (NOMACHI MOTOKI)
北海道大学・スラブ研究センター・准教授
研究者番号：50513256

沼野 充義 (NUMANO MITSUYOSHI)
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：40180690

村田 真一 (MURATA SHINICHI)
上智大学・外国語学部・教授
研究者番号：00265555

(4) 研究協力者

山崎 信一 (YAMAZAKI SHINICHI)
東京大学・非常勤講師
研究者番号：80376582
(H22→H23 研究協力者)

ミレン・マルチェフ (MARCHEV MILEN)
一橋大学・非常勤講師
研究者番号：なし
(H22→H23 研究協力者)

アンドレイ・ベケシュ (BEKES ANDREJ)
リュブリャナ大学・哲学部・教授

プレドラグ・ピペル
ベオグラード大学・文学部・教授